



Yuki Nemoto



2021 TotalEnergies 24 Hours of Spa Race Report



BORDERLESS LLC.

#F INCEL Katsushika 8-29-14 Okudo, Katsushika-ku, Tokyo-to 124-0022 Japan

■ Introduction

1924年、大正13年に第1回大会が開催されて以来、ベルギー・リエージュ州の緑豊かなスパ・フランコルシャン・サーキットを舞台に繰り広げられるスパ24時間レースも、2021年7月31日～8月1日に開催された大会で通算73回目を迎えた。

開催スタイルや、車両カテゴリーも変容し、サーキットもレイアウトの変更されるなど、時代の変化に合わせて、24時間のレースが激しい繰り広げられることに今も昔も変わりはない。その歴史の深さ、そして優勝、完走の難しさから、フランスの『ル・マン24時間レース』、アメリカの『デイトナ24時間レース』に並ぶ“世界3大耐久レース”に数えられている。

2021年は、世界各地でFIA-GT3マシンによる各メーカーのワークスチーム、トップドライバーによる自動車メーカーの看板を背負った戦いが繰り広げられる『インターコンチネンタルGTチャレンジ』の第1戦、そしてヨーロッパ各地で開催される『ファナテックGTワールドチャレンジ・ヨーロッパ・パワード・バイ・AWS エンデューランスシリーズ』の第1戦として開催され、4クラス58台がエントリーした。

インターナショナルGTオープンを主戦場に、GT3レースフル参戦2年目を迎えた根本悠生、そしてヴィンツェンツォ・ソスピリ・レーシング（VSR）にとって初めてのスパ24時間レース参戦であったが、根本はこれまで2度このスパ24時間レースのサポートレースである『ランボルギーニ・スーパートロフェオ・ヨーロッパ』に参戦し、2020年にはスポット参戦ながらレース2で総合優勝を手に入れている。初めてスパに降り立った2017年から「いつかはスパ24時間へ」という思いを抱いていた根本だったが、そのチャンスがついに訪れた。



2019年、ランボルギーニの育成プログラムである『ランボルギーニ・ヤングドライバーズ・プログラム』に所属していた根本は、2020年にイタリアGT選手権に参戦。シーズン序盤からシリーズをリードする巧みな仕事ぶりを評価され、2020年より、ワークスドライバーを専攻するよりハイレベルな『ランボルギーニ・GT3ジュニアプログラム』に選出された。シーズン後半も根本の走りは磨かれ、2020年シーズンのイタリアGT選手権のシリーズタイトルを獲得した。

その活躍が評価され、2021年シーズンはヨーロッパ全土を舞台に開催されるインターナショナルGTオープンにフル参戦。チームは根本と2016年からの付き合いのVSRだ。このチームは近年、ランボルギーニのモータースポーツ部門『スクアドラ・コルセ』と密接な関係を築き、ランボルギーニの若手育成プログラムの中心を担っており、今大会へは若手ドライバー4人体制でシルバーカップに参戦する。

VSRのスパ24時間レースへの参戦はスクアドラ・コルセによる若手ドライバーの育成と、次の世代のワークスドライバー選出の一環であることをお伝えしておきたい。ドライバー陣容も、スクアドラ・コルセを統括するジョルジオ・サンナが決定した。つまり、ドライバーは将来のランボルギーニのワークスとしてその走りが期待されている存在であることを意味している。

メンバーはランボルギーニ GT3 ジュニア・プログラムの一員で、インターナショナル・GTオープンに参戦する根本悠生とバプティスト・ムーラン。今年のランボルギーニ・ヤングドライバーズ・プログラムからグレン・ヴァン・ヴェル口。そして、アウディスポーツ・アジアの契約ドライバーであり、GT3レースの経験が豊富なマーティン・ランプだ。最年長者であり、他メーカーの育成プログラムで結果を残してきたランプの存在は、根本、ムーラン、ヴァン・ヴェル口の3名の力量を図るベンチマークとしてチームに加わっているという見方もできるだろう。



■ フリー走行／プレ・クオリファイ／公式予選

7月29日10時50分から走り始めとなる30分間のフリー走行が行われ、15時35分からは1時間のプレ・クオリファイが行われた。このプレ・クオリファイは公式予選が何かしらの理由で中止、セッションが実施されなかった場合にスターティンググリッドを決定するタイムの参考となるセッションではあるが、実質には2回目のフリー走行として扱われている。

気温16.7～17.6度、路面温度20.5～24度という中で行われたフリー走行では、2分21秒888を記録してシルバーカップ17番手／総合58番手となる。続く、プレ・クオリファイは気温19.6度、路面温度27.2度中、2分20秒962を記録してシルバーカップ14番手／総合44番手となった。いずれもベストタイムを計測したのは根本悠生だ。チームは「クルマの持てる全てを引き出している」と根本を高く評価するが、本人は更なるタイムアップを欲していた。普段インターナショナルGTオープンというGTワールドチャレンジとは違ったBoP（バランス・オブ・パフォーマンス／性能調整）のもとでレースをするVSRも、このスパ24時間という舞台でランボルギーニ・ウラカン GT3 Evoのポテンシャルを引き出すことに苦心する。

そして現地時間20時40分より計1時間21分の公式予選を迎える。4人の平均タイムで決勝のスタートポジションを決する中、ランプが2分20秒890を、ヴァン・ヴェルロが2分21秒760を、ムーランが2分23秒089というタイムを記録する。そして最終アタッカーを務めた根本は著名なベテランドライバーたちに割って入る2分19秒691を記録するも、666号車はシルバーカップ14番手／総合43番手という結果となり、上位20台がポールポジション争いを繰り広げるスーパーポール進出とはならなかった。



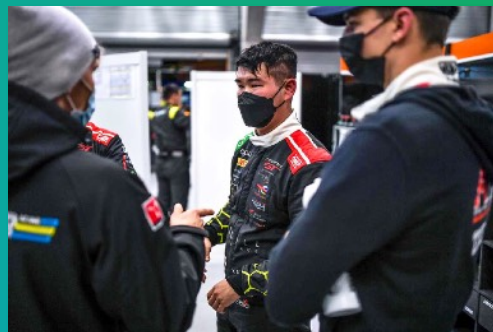
■ 決勝

7月30日、分厚い雲の隙間から青空が顔を覗かせるドライコンディションのもと、現地時間16時30分に24時間の決勝レースはスタートを迎えた。チームは決勝結果を大きく左右する重要なスタートを根本悠生に任せた。根本はチームの、そしてランボルギーニの期待に答える走りでシルバーカップ11番手に浮上し、2周目に突入する。

プロクラス、プロアマクラスなど、他クラスのマシンに囲まれながら根本は周回を重ねるが、スタートから22分、10周目のオールージュ〜ラディオンで3台が絡む多重クラッシュが発生。マシンが大きく大破するアクシデントにサーキットは一時凍りついたが、3名のドライバーは命に別状はなかった。このアクシデントにより根本の第1スティントの大半が、FCY（フルコースイエロー）となる。

シルバーカップ6番手を走行する666号車はレース開始から1時間が経過した時点で最初のピットインを敢行、油とタイヤ交換を行うがドライバーは引き続き根本悠生が務める。その直後、レース再スタートに向けてFCYからセーフティカー先導と状況は変わったが、ここでチームから666号車にピットロードスルーの指示が飛ぶ。セーフティカー導入直前、FCYが45分以上になるという情報があったため、ここでドライブスルーをすることで65分という1スティントの最大搭乗時間をクリアしようという意図であったが、これでクラス17番手／総合50番手までポジションを下げてしまう。そして、レースはリスタートを迎えたが、その直後に土砂降りの大雨がスパを襲う。

しかし、再びピットに入りレインタイヤに変えた根本はハイペースで周回を重ね、シルバーカップ13番手まで順位を取り戻すと、スタートから2時間を過ぎた39周目にピットイン。根本は第3スティントを担当するヴァン・ヴェル口にステアリングを預けた。

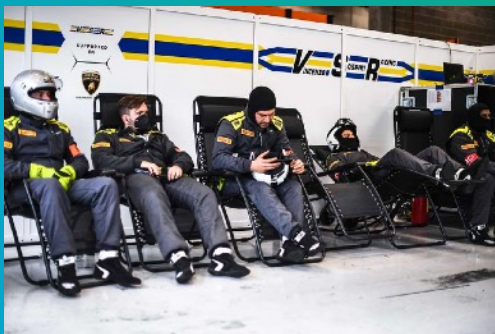


根本は短い休息を挟み、現地時間で8月1日を迎えようかという深夜、162周目から再びステアリングを握った。クラス10番手／総合35番手からひとつでもポジションを上げるべく、そして確実にチェッカーを迎えるべく1周1周を噛み締めるように、決して無理はせずに周回を重ねた。約2時間後、現地時間で2時を迎えたところで、再びドライバー交代を迎え、根本はヴァン・ヴェルロにステアリングを預けた。しかし、これが根本にとっての今大会最後のスティントとなってしまった。

まだ夜も深い現地時間3時30分ごろ、ヴァン・ヴェルロがドライブする666号車はコースサイドにストップする。原因はコース上のデブリがラジエーターフェンスを突き破りラジエーターを破壊し、エンジンにダメージを負ってしまったためだ。666号車はオフィシャルの手により、リペアエリアに運ばれたが、チームはマシンの状況を確認し、修復は不可能と判断。245周、約7時間のところで夜明けを迎える前にリタイアとなってしまった。

もし、水温の異常にヴァン・ヴェルロが気づくことができていれば、コースサイドでのストップという事態は防ぐことができたかもしれない。これは経験が浅い若手ドライバーにとって大きな学びとなっただろう。リタイアの知らせはトレーラーで休息をとっていた根本の耳にも入れられた。

夜明けを前にレースを終えることとなった根本悠生だが、あくまで今大会への参戦はスパ24時間という大舞台を制する第一歩であると考えている。そして、実際にこの大舞台を経験したことで、スパ24時間というレースへの想いは強まることとなった。今回は手ぶらでサーキットを後にすることとなったが、「次は優勝トロフィーを日本に持ち帰る」。そう誓いながら、モータースポーツの歴史を紡いできたスパ・フランコルシャンを後にした。



■ 根本悠生 コメント

「スパ24時間はサポートレースのランボルギーニ・スーパートロフェオ・ヨーロッパに出ていた頃から間近で見ているが、参戦できなかったという憧れのレースです。そんな憧れのレースに参戦でき、ランボルギーニ、VSR、そしてinCELL Garage、OPPOといったスポンサーの皆様に感謝しております」

「過去には富士24時間に参戦していたこともあって、国内でもしっかりと準備した上で挑みました。チームは24時間初挑戦でしたが、監督は現役時代に24時間レースの経験も豊富で、チームもできる限りのサポートをしてくれたこともあり、非常に快適に挑戦することができました」

「ただ、予選一発のセットアップ作りや、決勝中のクルマの異常に早めに気付くといった点で、まだまだチームもドライバーも力が及ばないところがあったと感じています。決勝のペースが悪くなかっただけに、悔しいです」

「この素晴らしいレースへの挑戦を1回で終わるつもりはありません。今後、毎年挑戦できるように、自分もチームも力をつけていきたいと思います。まずは今シーズン残りのインターナショナルGTオープンで結果を残し、来年のスパ24時間に挑む力をチーム、そしてチームメイトとともにつけて、成長していきたいと考えております」

「今大会では今まで以上にたくさんの皆様からたくさんのご声援を頂きました。本当に、ありがとうございました。もっと、もっといいレースをお見せできるように頑張りますので、引き続きよろしくお願い申し上げます」



Sponsor/Partner



本件に関するお問い合わせは
合同会社ボーダーレス
info@borderless-motorsports.comまで